呼称、書称が困難であるにもかかわらず、文字数の想起が可能であった流暢性失語の一例

○柴田　千穂（しばた　ちほ）[1)]、　宇野　彰[2)]

有馬温泉病院　言語療法科[1)]、国立精神･神経センター[2)]

（要旨）呼称、書称が困難であるにもかかわらず、文字数の想起が可能である Wernicke 失語症例を報告した。喚語困難時、自ら数を述べる反応が頻繁に見られた。この数について検討を行った結果、拗音を含む語の仮名文字数の想起が清・濁音からなる語と同程度可能であったことから、症例の述べる数は、モーラ数というより、文字数に相当する可能性が示唆された。また、仮名表記妥当性が高く漢字表記妥当性が低い語の方が、その反対の条件の語よりも症例の述べる「数」の正答率が有意に高かった。本例は呼称時、モーラや音のイメージよりも、仮名の書字イメージの喚起がある程度可能であり、音韻情報処理過程よりも意味から語彙への経路である視覚的意味処理過程が活性化された可能性があると考えられた。

Key words: 書字(writing)、喚語困難(word finding difficulty)、文字数の想起(retrieval for number of letters)

【はじめに】

単語音読に関する情報処理過程に関して、二重回路仮説、triangle model などが代表的なモデルとして検討されている。その後、修正が加えられた結果、多くの説明仮説が提案され、シミュレイション研究によってその妥当性が検討されている。しかし、書字の情報処理過程に関してはまだ少ない。

本研究では、書字が困難であるにもかかわらず、文字数の想起が可能な失語症例に関する症状を詳細に分析することにより、書字にいたる処理過程について検討したので報告する。

【症例】

症例：46 歳、女性、右利き、中学卒。

主訴：うまく話せない、右側が見えない。

既往歴：高血圧、糖尿病。

現病歴：2001 年 6 月、入浴後気分不良なるも様子を見ていた。翌日、A 病院を受診し、脳梗塞と診断され、入院し保存的治療を受けた。7 月、一旦退院後、B 病院にﾘﾊ目的で入院した。2002 年 1 月、当院において外来でのﾘﾊを開始し、6 月に集中的言語訓練を目的に当院に入院した。

【入院時所見】

神経学的所見：意識は清明で、見当識も保たれていた。Kohs 立方体組み合わせテスト IQ64、RCPM30/36。歩行に障害が認められない程度の軽度の右片麻痺および右同名半盲が認められた。

神経心理学的所見：軽度の観念失行、観念運動失行および中等度の Wernicke 失語が認められた。

放射線学的所見：2002 年 4 月撮影の頭部 MRI 画像では、左頭頂葉および側頭葉に広範な梗塞巣を認めた。

言語症状：聴覚的理解は検査上では短文レベルまで可能であったが、日常会話では聞き誤りが見られた。文字理解は、漢字仮名ともに比較的保たれていた。書字は漢字が若干可能であったが、仮名は困難であった。発話は流暢で多弁、同じ事を何回も繰り返して言う傾向があり、話量の割に内容に乏しかった。復唱は単語で約半分程度可能であった。音読は仮名の方が漢字よりも幾分良い傾向にあった。仮名の音読は、50 音や、家族の名前などをキューとして用いることが多かった。呼称は SLTA20 語のうち、4 語可能で、呼称が困難な語でも絵を見ると自発的に「あっ、これは3つやね」など、数について述べる様子が頻繁に見られた。その様子は、漢字音読課題時にも見られ、また、検査場面に限らず日常においても、(朝、何を飲みましたか？)「えーと、あの、4つの･･･」(4つ？コーヒーですか？)「そうそう、それ」といったように、数を言う場面が観察された。SLTA 補助テストを用いた呼称、書称課題では、呼称正答数は21/80、書称正答数は2/80であった。呼称課題では、喚語困難時、「3つ」「4つ」という数の表出に加え、時には「小さいのもあるね

連絡先：〒272-0827 市川市国府台 1-7-3　Tel.047-372-0141　e-mail:uno@ncnp-k.go.jp

んけど」、「これはあっちで書くほうのやつ」等の発話も見られた。

【方法】

1) 症例の述べる「数」が何を表しているのかについて検討を行った。SLTA 補助テストの呼称課題時、正答に至らず、また自発的に数についての言及がなかった場合、「いくつだと思いますか？」と数についての発言を促した。
2) 症例が述べる「数」の正誤にはどのような傾向があるのかを見るために、単語 185 語において呼称課題を行い、頻度、親密度による影響を検討した（ここで用いた単語の頻度および親密度、後述の単語表記妥当性のデータはすべて NTT データベースシリーズ『日本語の語彙特性』による）。
3) 単語の頻度・親密度・モーラ数等が結果に影響を与えないよう、各々の条件を統制した単語を選び、その中で呼称が困難な清、濁音からなる語 20 語と、拗音を含む語 20 語を用意した。それらの絵を症例に提示し、症例の持つ「イメージ」を大小 2 種類の丸を書いて示す課題を行った。症例が述べる「数」が音のイメージ、すなわちモーラであるなら、拗音を含む語を大小 2 種類の丸で示すことは困難であり、清、濁音からなる語に比較して、正答率は低下すると予想された。

【結果】

1) SLTA 補助テストの呼称課題での「数」の検討：症例の述べた「数」が語のモーラ数、もしくは仮名文字数のどちらかに合致していたものは呼称不可な語 59 語のうち、53 語であった。
2) 頻度と親密度の影響について：その結果、頻度・親密度が高く、またモーラ数の少ない単語ほど、呼称成績およびモーラ数もしくは仮名文字数と合致する率が高くなる傾向が認められた。
3) 拗音を含む語を大小 2 つの丸で書き分ける課題の正答率：清、濁音からなる語の正答率と比較して有意差は認められなかった。課題の誤り方において、拗音を含む語では、小さく表記する文字があるところまでは認識されているものの、その位置の不正確さによるものが多く見られた。また、呼称困難な、仮名表記妥当性が高く漢字表記妥当性が低い語と、反対に仮名表記妥当性が低く漢字表記妥当性が高い語において、症例の述べる「数」の正答率を比較した結果、仮名表記妥当性が高く漢字表記妥当性が低い語の方に5％水準で有意に高い正答率が認められた。

【考察】

呼称や書称が困難であるにもかかわらず、拗音や促音と思われる存在について言及する様子が見られたこと（「これは小さいのがあるね」）、および通常、片仮名表記される語は自発的にそれと指摘する傾向があること等から、症例は絵や漢字を見たときに、音ではなく、仮名の視覚的イメージを想起しているのではないかと考えられた。

この仮名文字数の想起に置いて、呼称が困難とはいえ、曖昧な音のイメージの関与を否定することは難しい。しかし、モーラ数と仮名文字数が同じである単語（清、濁音からなる語）と異なる単語（拗音を含む語）において、症例がイメージする数の正答率に差が見られなかったこと、すなわち、拗音の存在や時にはその位置の想起も可能であったことから、症例は曖昧であっても、音の想起から仮名の文字数を想起したというより、絵や漢字という意味から直接文字数を想起した可能性が高いと考えられた。さらに、仮名表記妥当性が高く漢字表記妥当性が低い語の方が、仮名表記妥当性が低く漢字表記妥当性が高い語に較べて「数」の正答率が有意に高かった結果もその裏づけの一つになり得ると考えられる。

物井ら（1975）、三島ら（2000）は、仮名の書字過程をモーラ分解、音韻抽出を経て音に対応した文字を想起する、いわゆる音韻処理過程を想定している。しかし、今回の症例は、意味から直接文字数を想起する視覚性意味処理過程の存在を示唆していると思われる。また、いわゆる二重回路仮説において、音読の処理過程ではこのような語彙経路の存在はよく知られているが、書字においても存在することを示したのではないかと考えられた。

謝辞：本研究に貴重なご意見を賜った東京都老人総合研究所言語・認知・脳機能研究グループリーダーの辰巳格博士に深謝する。

【文献】

物井寿子，笹沼澄子：失語症患者における音韻抽出能力と仮名文字能力との関係．音声言語医学,16:169-170,1975.

三島佳奈子，武田克彦ほか：仮名の脱字を主症状とする書字障害例-仮名書字プロセスの検討-．失語症研究,20:280-285,2000.